

大空の彼方へ。

# OHSUMI

この地に眠る、平和の礎をたどる～太平洋戦争の足跡をたどる旅～

## 決六号、大隅という大きな要塞

現在、大隅半島の鹿屋市に立つ海上自衛隊鹿屋航空基地は、かつての鹿屋海軍航空隊。太平洋戦時中は海軍の航空基地として使用され、戦争末期の特攻作戦では70隊445機、828名の若者がここから出撃した。大隅には、この鹿屋基地以外にも岩川、串良、笠之原、桜島などに海軍航空隊基地が置かれ、また志布志湾岸沿いの串間、大崎、東串良、内之浦などには回天発射基地やトーチカなど、要塞としての軍備が敷かれた歴史があった。その激動の時代から60余年。戦いの記憶が忘却の彼方へ押しやられようとしている今、大地にたたずむ戦跡をめぐり、命をかけて戦った人の想いと、平和への祈り、もう一度受けとめたい。

[特集モニターツアー]

1945年 大隅半島の戦跡をめぐる



# 本土決戦前夜、要塞と化した大隅半島。

太平洋戦争末期、長崎、広島への原爆投下をもって終戦を見ない場合、アメリカは日本本土上陸作戦を目論んでいた。牧歌的な風景を見せるこの地が、決戦の舞台となった可能性をにわかに信じることはできないが、残された要塞や地下壕、発電所跡などを目にするると、戦争が遠い日の出来事ではなかったことを知る。そして、いまある命のありがたさをあらためて思つのだ。すべてが時の彼方に風化してしまわぬうちに、残されたものをしっかりと受けとめる義務が、僕たちにはある。

戦跡 1

## 8つもの

### 航空基地からの特攻隊

太平洋戦争末期、特攻基地が置かれた地として知覧、万世があまりにも有名なが、実は、大隅半島にも鹿屋基地を筆頭として数多くの航空基地が配置されていた。中でも海軍の鹿屋基地、国分基地、串良基地などからは908名、427名、363名という数多い特攻兵士が出撃し、若者の命が大空に散つた歴史の壮絶なドラマがあった。

戦跡 2

### 美濃部正少佐と芙蓉部隊

1945年5月、戦局が激化しつつあった大隅、岩川の地に、静岡県藤枝海軍航空基地（現航空自衛隊静浜基地）より「芙蓉部隊」と呼ばれる航空隊が着任した。指揮官、美濃部正少佐は特攻作戦より夜間戦闘を主張し、隊員に特攻出撃を命じることはなかった。航空機の確保にも独自の手法を用い、終戦まで戦力の衰えを知らない精鋭部隊であった。

戦跡 3

### 地下に張りめぐらされた基地

大隅半島の広大な大地に配置された基地では、地下に堅牢な通信指令室や発電所、壕舎などが築かれ、それらの施設をつなぐ地下通路が張り巡らされていた。現在では、そのほとんどが朽ちて形跡をとどめていないが、現在、畑地の中や民家の周辺にわずかに遺された史跡の片鱗に、往時の空気をしのぶことができる。

戦跡 4

### 志布志湾岸に

### 築かれた人間魚雷発射基地

沖繩戦後の決の号作戦（本土決戦）は、志布志湾を第一候補地として想定、昭和19年夏から迎撃のための軍事施設が湾岸に構築された。内之浦地区には人間魚雷回天の発射基地も築かれ、海岸の岩場を掘削してレールを敷設した形跡が見られる。同様に志布志湾を挟む串間にも回天の発射基地は構築された。終戦まで実戦が無かったのは幸いであった。

戦跡 5

### 遺された物と思い出

1945年3月11日、第762航空隊の海軍陸上爆撃機24機が鹿屋を飛び立ち、鹿児島市鴨池海軍基地を出撃した二式飛行艇と佐多岬上空で会合しウルシー環礁に向かった。この出撃が最初の神風特別攻撃隊である。現在、旧海軍航空隊関連の史料は「鹿屋航空基地史料館」に展示され、垂水と吹上浜で引き上げられたゼロ戦から復元した零式艦上戦闘機、世界で唯一現存する二式飛行艇などが遺されている。

戦跡 6

### 60余年前の日本軍の兵力

1945年4月8日、鈴木貫太郎内閣発足の翌日、本土決戦の準備要綱が支達された。最も上陸の可能性が高いとされた志布志湾岸には地下壕要塞が構築され、上陸作戦を波打ち際で食い止める計画であった。しかし当時、日本には海軍の海上戦力（機動部隊）は残っておらず、数少ない駆逐艦などはあったものの動力となる燃料は乏しく、実質は震洋部隊による特攻に頼らざるを得ない状況であった。

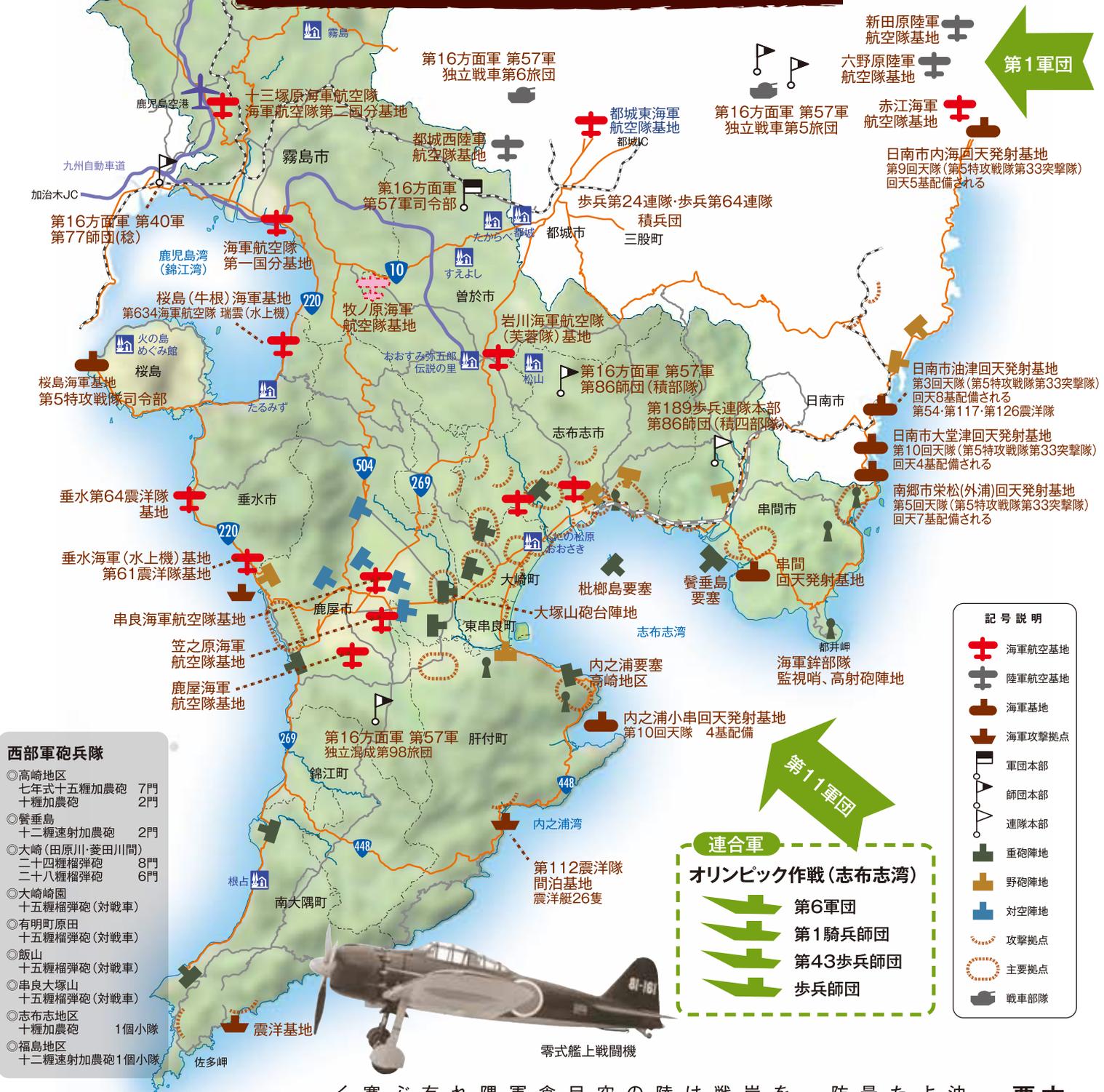
# 大隅戦跡マップ

60余年前、確かにあった歴史のドラマが  
時の流れに風化してしまわぬうちに、記憶に刻もう。



二式飛行艇

桜島海軍基地跡



## 西部軍砲兵隊

- 高崎地区  
七年式十五糎加農砲 7門  
十糎加農砲 2門
- 饗垂島  
十二糎速射加農砲 2門
- 大崎(田原川・菱田川間)  
二十四糎榴弾砲 8門  
二十八糎榴弾砲 6門
- 大崎崎園  
十五糎榴弾砲(対戦車)
- 有明町原田  
十五糎榴弾砲(対戦車)
- 飯山  
十五糎榴弾砲(対戦車)
- 串良大塚山  
十五糎榴弾砲(対戦車)
- 志布志地区  
十糎加農砲 1個小隊
- 福島地区  
十二糎速射加農砲1個小隊

記号説明	
	海軍航空基地
	陸軍航空基地
	海軍基地
	海軍攻撃拠点
	軍団本部
	師団本部
	連隊本部
	重砲陣地
	野砲陣地
	対空陣地
	攻撃拠点
	主要拠点
	戦車部隊

**連合軍**  
**オリンピック作戦(志布志湾)**

- 第6軍団
- 第1騎兵師団
- 第43歩兵師団
- 歩兵師団

**本土侵攻を阻止する要塞となった大隅の地。**

1945年、太平洋戦争の終末期。沖繩が陥落し、連合軍は、南の島を伝うように本土に攻め上がるつもりであった。日本本土を守るため、日本軍は本土最南端の大隅半島、薩摩半島を中心に防御態勢を敷いていた。

折しもその頃、連合軍では志布志湾を中心とする日南海岸沿岸、吹上浜沿岸への上陸作戦である「オリンピック作戦」の計画が進行中であった。日本陸軍は司令部を松山に置き、志布志湾岸上陸作戦の阻止を自論んだ。本土最南端の軍の重要拠点を守り、首都東京への空襲の足がかりを阻止することがその目的であった。しかし、日本軍の軍備も食糧もすでに潤沢なものではなく、連合軍による作戦が開始されていたら、大隅では沖繩以上の肉弾戦が繰り広げられたであろうことが予想された。当時、有明湾と呼ばれていた志布志湾に浮かぶびろろ島、饗垂島が急ごしらえの要塞につくり上げられ、海岸沿いには多くの守備拠点が構築された。



志布志洞窟陣地跡

零式艦上戦闘機

# 時の彼方に薄れゆく「戦争」を知る旅。

60余年前、愛する人を守り、国を守るため、この大隅の地から多くの若者が大空へ飛び立ち、散った。半世紀余りが過ぎたいま、大地の中にたたずむ戦跡は風化の道をたどり、戦争の事実さえも人々の記憶から消え去ろうとしている。先人たちが全身をにかけて築いた平和の尊さが人々の心から薄れゆくいま、戦争の痕跡を訪ね、ふたたび平和の意味を後世に語り継ぎたい。

## 1 桜島 海軍基地 ~第五特攻戦隊司令部 (鹿児島市桜島)



1945年4月から7月にかけて桜島海軍基地は第五特攻戦隊司令部になり、桜島は魚雷や回天などの武器、弾薬を貯蔵する一つの大きな要塞になった。作家梅崎春夫の出世作「桜島」は、自らの桜島における海軍体験をもとに書かれた小説である。



## 2 串良海軍航空基地地下壕電信司令室 (鹿屋市串良町)



太平洋大戦末期、教育航空隊として開隊された串良海軍航空隊では、約5000人の飛行予科練習生が航空機の搭乗・通信等の特訓を受けた。昭和20年3月1日、特攻隊の基地となり、終戦までの半年間に363名が出撃。

## 3 海軍笠之原航空基地 (鹿屋市)



大正11年から終戦までの24年間、旧陸海空軍の飛行場基地として使用された。戦争末期には海軍航空基地が設置され、神風特攻隊の基地になった。昭和20年3月18日、連合軍の集中爆撃を受けて施設は全滅。この入り口が唯一の遺物である。

## 4 叶岳ふれあいの森 (肝付町内之浦)



内之浦地区のほぼ中央にある「叶岳ふれあいの森」。555段の階段を登りきると内之浦湾、国見連山など一望する絶景が広がっている。

## 5 内之浦要塞~砲台・トーチカ (肝付町内之浦)



沖縄戦後の本土決戦の第一候補地に志布志湾岸が想定され、迎撃のための軍事施設が志布志湾両岸に構築された。海蔵集落のある半島一帯はとくに戦略的価値が認められ、今も6カ所の砲台・4カ所のトーチカ跡が残っている。

## 6 権現山 (肝付町高山)



肝属川河口の波見交差点より山手へ入る。駐車場から登山道を10分ほど上がった山頂からは、柏原海岸から志布志湾へかけて一望できる。



### コースの他にもある戦争の足跡の数々

このほかにも大隅半島には数多くの戦争の爪痕がある。その足跡をたどれば、平和にたたずむ田園風景が精彩を帯びて見えてくる。

- **鹿屋海軍航空機地 (鹿屋市)**  
沖縄決戦ではカミカゼ特別攻撃隊の作戦の中心地となり、日本で最も多い70部隊711機が出撃した。現在は海上自衛隊鹿屋航空基地として1700名が勤務する。
- **鹿屋航空基地史料館 (鹿屋市)**  
鹿屋基地あり、史料館2階が旧海軍航空隊関連の展示となっています。

- 2階にある零式艦上戦闘機は垂水と吹上浜で引き上げられたゼロ戦から復元されたものです。
- **特攻隊戦没者慰霊塔 (鹿屋市)**  
慰霊塔には串良基地から出撃し、散華していった隊員の名前が彫られており、慰霊塔周辺にはこの基地に駐屯した海軍攻撃第二五四飛行隊串良派遣隊等の各航空隊の石

- 碑が数多く建てられている。
- **垂水海軍航空隊基地 (垂水市終原地区)**  
1944年2月、普通科雷爆練習生教育航空隊として開隊。普通科雷爆練習生約800名、甲種飛行予科練習生約600名が卒業して戦地に向かっていった。
- **桜島牛根海軍航空隊基地**

- (垂水市牛根地区)  
滑走路ではなく海を滑走路として活用する前線攻撃基地として桜島牛根秘匿基地が設置された。
- **志布志洞窟陣地 (志布志市)**  
志布志市街には、歩兵第187連隊第3大隊の深見大隊が総経長16キロメートルに及ぶ洞窟陣地を構築していた。

13



### 都井岬 (宮崎県串間市)

志布志湾の北端の切っ先に位置する岬は、根元がくびれた半島のような形で太平洋に突き出し、山頂からは一帯の地形が一望できる。

12



### ダグリ岬自然公園 (志布志市)

志布志湾と太平洋を望む岬には現在、亜熱帯の植物が茂り、白砂青松の海水浴場、遊園地などが整備され、平和な風景を見せている。

11

### 芙蓉之塔 (曾於市岩川)



太平洋戦争末期における日本海軍第131航空隊所属の3個飛行隊の通称であった。美濃部正少佐の下で独立運用され、特攻が主体となっていた当時の海軍航空隊にあって、独自の夜襲戦法によって活躍した。

10

### 岩川海軍航空隊基地 発電所用壕跡 (曾於市岩川)



公民館近くを散策すると、旧国鉄大隅線の跡がしのばれるものも多く、国鉄が基地建設、物資輸送に活躍していたことがうかがえる。通信司令壕から直線で数百mの県道沿いには発電所壕があり、内部を見学できる。

9

### 岩川海軍航空隊基地 通信司令部壕跡 (曾於市岩川)



戦局が激化した1945年、静岡県藤枝海軍航空基地(現航空自衛隊静浜基地)より「芙蓉部隊」と呼ばれる航空隊が岩川に着任。周辺のカモフラージュ(偽装)によって、大切な航空機を最後まで守り抜いた。

8



### 第86師団 (志布志市松山)

昭和19年、留守第56師団を基幹に久留米で編成。当初は西部軍の指揮下にあったが、翌年、新設された第57軍戦闘序列に編入。志布志湾沿岸配備師団が防備する中で出撃する機動打撃師団として本土決戦に備えた。

草に覆われていたり、朽ち果てかけていたり  
60余年の歳月が「戦争」を風化しようとしている。  
このままでは、忘れてはいけない  
事実・歴史が失われてしまう。  
記憶から無くさないためにも、その目で足で  
後世へ繋いでいくために。



7



### 大塚山砲台陣地 (鹿屋市串良町)

展望台から360度のパノラマを楽しめます。ここにも大塚山砲台陣地が築城されており山をくり抜いて志布志湾が見渡せる位置に銃眼があったと言われています。写真は大崎町四季の森トーチカ陣地跡

**オリンピック作戦 最前線基地・志布志**

志布志湾岸は、日本を攻略する上での重要拠点で終戦時には大隅半島から宮崎県北部まで10力以上の航空基地があった。

これらのほとんどは海軍航空基地で、当時はカミカゼ特別攻撃隊の重要拠点としてアメリカ軍にマークされ航空写真でその所在を把握されていた。これに対し薩摩半島の知覧・万世青戸には陸軍航空基地が設置されており、陸軍の特別攻撃隊が発進する前線基地とされていた。当時の日本海軍と日本陸軍は戦果を競い合う形となり、終戦末期まで連携した作戦行動をとっていたとは言いがたい状況であった。連合軍は1945年の台風シーズンが過ぎた頃から1946年3月にかけて、南九州を関東上陸の為に航空基地化するために宮崎の都農と鹿児島島の川内を結ぶ線を進出北限とし、宮崎海岸、志布志湾、吹上浜の三正面同時上陸作戦を執行する予定であった。この作戦をオリンピック作戦といい、対抗する日本軍は戦力の不足から三正面の守備が難しいことから志布志湾決戦を自論み防御陣地を構築していた。

# 特攻出撃した戦死者数が最も多かった海軍鹿屋基地。

九州で特攻基地というと「知覧」を思い浮かべるのですが、南九州には鹿屋基地を筆頭に多くの特攻基地が存在していました。なかでも特攻出撃戦死者数を比較すると、最も多い基地が海軍の鹿屋基地で908名、次いで陸軍の知覧基地が436名、海軍の国分基地が3番目に427名、続いて宮崎の赤江基地、海軍の串良基地、陸軍の万世基地、

海軍の出水基地、海軍の指宿基地、陸軍の都城基地と続き、戦局での重要な場所だと推察できます。

もし、8月15日に終戦にならなかつたら、南九州は間違いなく激戦地の一つとして数えられていたでしょう。防御陣地を築城したものの砲弾の備蓄もなく、食料事情からも悲惨な状況になっていたことと思われます。特攻出撃した航空機の数も膨大ですが、当時このような航空戦力を南九州で持っていたのではなく、日本全国各地から動員された飛行隊が飛び立っていった場所なのです。

## 鹿屋海軍航空隊基地

戦局が悪化し本土決戦に備えた1945年鹿屋基地には陸海軍の全航空部隊を統合する第五航空艦隊司令部が設置された。沖縄決戦では神風特別攻



撃隊の作戦の中心地となり、日本で最も多い70部隊711機が出撃した。当時の庁舎を現在もそのまま使用しており弾痕などが生々しく当時を伝える。当時鹿屋には、国鉄大隅線を引き込んで物資を運び込み、海軍航空廠が併設され、基地の外には航空廠の分工場が多数存在した。現在は海上自衛隊鹿屋航空基地として第一航空群など6部隊、1700名が勤務する。下の写真は、アメリカ海軍ニュース「Naval Aviation News」に掲載されていた写真で、当時連合軍は拠点をとんと把握して



アメリカ海軍ニュース/1945年8月15日号掲載の鹿屋海軍基地の航空写真(1945年当時のバックナンバーが閲覧できます。<http://www.history.navy.mil/nan/backissues/1940s/1945/backissues1945.htm>)

第86師団積兵団 芳仲師団長が「戦争に負けても日本(神州)は亡びない」として「神州不滅」の碑石を将兵相携えて建立。



## 笠之原海軍航空隊基地



「掩体壕」とは、軍用機を敵の空襲から守るための格納庫でした。

旧笠之原飛行場として、大正11年8月から24年間にわたり、旧陸海軍の飛行場基地として使用されていた。太平洋戦争末期の昭和19年1月15日には海軍航空基地が設置され、田中隊1個中隊が常駐することになった。又、昭和20年1月には第203航空隊零式戦闘機72機が配備され、(神風)特別攻撃隊として南海の戦場に散っていった。その後昭和20年3月18日の連合軍の集中爆撃のため、格納庫を始めとする基地施設は全滅し、当時を語る唯一の遺物として、このコンクリート入り口が、東西に走っていた滑走路へ通ずる地下道入り口並びに地下通路指令

## 鹿屋航空基地史料館

鹿屋市にある海上自衛隊鹿屋航空基地の一角の史料館2階が旧海軍航空隊関連の展示となっています。2階にある零式艦上戦闘機は垂水と吹上浜で引き上げられたゼロ戦から復元されたものです。太平洋戦争末期の1945年3月11日、第762航空隊の海軍陸上爆撃機「銀河」(中島飛行機製)24機が鹿屋を飛び立ちました。鹿児島市鴨池海軍基地を出撃した二式飛行艇と佐多岬上空で会合しウルシー環礁に

向かいました。この出撃が最初の神風特別攻撃隊菊水部隊梓隊(通称:梓特別攻撃隊)です。以降終戦まで南九州から多くの航空機が出撃しました。屋外には、世界で唯一現存する二式飛行艇が展示してあります。

鹿児島県鹿屋市西原3丁目11-2  
TEL.0994-42-0233  
開館時間/9:00~17:00(入館16:30)  
入館料/無料



# 大空の彼方へ。～太平洋戦争の足跡をたどる旅～

滑走路に続く地下通路及び地下通信指令室入口



室として現存している。

笠之原付近には、畑の中の掩体壕も残っており、

当時を知る土地の所有者は掩体壕にはゼロ戦が格納してあったといい、戦後、鉄をとるために破壊しようとしたがビクともしなかったと言う。  
また、近くには弾薬庫跡もあり、壁には生々しい弾痕が残っている。



## 串良海軍航空隊基地

串良海軍航空隊は、第二次世界大戦末期に教育航空隊として開隊され、約5000人の飛行予科練習生が航空機の整備・搭乗・通信等の猛特訓を受けたところである。昭和19年4月1日には、実戦部隊に編入され、本土決戦に備え串良海軍航空基地の整備が進められた。昭和20年3月1日からは、特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に串良海軍航空隊からは

第一第二第三護皇白鷺隊、徳島第一徳島第二徳島第三徳島第四徳島第五白菊隊などの特別攻撃隊員363名が出撃している。現在は串良海軍航空基地地下壕通信司令室が個人住宅の敷地内にあります。有名な皇白鷺隊や徳島の白菊隊などの機上の特攻隊員と通信し出撃等の命令を発信し、また特攻隊の最後の通信の途絶を確認した地下通信司令室壕です。すぐ近くには畑の中にさらに大きなコンクリート製の地下壕入口があり



アメリカ海軍撮影の航空写真、串良海軍航空隊基地がくっきりとわかる



串良海軍航空基地地下壕司令室外観



串良海軍航空基地地下壕通信司令室内部

まず。通信司令室の壕のサイズから考えるとかなり大きくコンクリートの厚さもかなりのものになります。付近には大塚山展望所がありますが、ここにも大塚山砲台陣地が築城されており山をくり抜いて志布志湾が見渡せる位置に銃眼があったと言われています。

## 内之浦要塞 (高崎・海蔵地区)

沖繩戦後の決6号作戦(本土決戦)は、志布志湾を第二候補地に想定し、昭和19年8月から志布志湾の両岸に迎撃のため軍事施設が構築され始めた。

海蔵集落のある半島二帯は戦略的価値が高いと認められ、志布志湾岸で最も大きい要塞が構築された。そのため、砲台跡6カ所(7門の高射砲)・弾薬庫1カ所・探照灯1カ所(飯ヶ谷)の遺

跡が残っている。2連式のトーチカ(機関銃座)の外に、海蔵岬他2カ所の計3カ所が現存している。なお当時は、もう1カ所あったことが確認されていることから、トーチカは全部で4カ所、機関銃座は5つであったと考えられる。このトーチカは波見(硯石)近くにも1カ所あったといわれている。

震洋特攻艇基地は、火出ヶ崎・内之浦浜・小白木浜にあったという。

内之浦地区には、回天発射基地もあったといわれ近年まで右の写真には、回天(魚雷)を運搬するレールがあったという。岩場を人工的に掘削してあり、前方には串間・都井岬を望める位置にある。

また、岩場のところどころにコンクリートによる人工物を見受けるところが、レールを敷設していたのではないかと伺える。



内之浦砲台跡



海蔵地区2連トーチカ外観



トーチカ内部の銃座跡

内之浦臨時要塞の構築は、豊予要塞司令官を長とする有明作業隊を編成、歩兵1個大隊、重砲兵4個中隊、工兵1個大隊、自動車1個中隊からなり、高崎、枇杷島(ヒロウジマ)、鬘垂島(ビンダレジマ)に臨時砲台等



回天発射基地跡

を構築することになった。これより小規模ではあるが、南大隅町佐多伊座敷にもここを構築した部隊が陣地構築に向かった。もちろん、終戦まで実戦がなかったのは不幸中の幸いであった。

## 岩川海軍航空基地

鹿屋海軍航空基地が第五航空艦隊司令部がおかれ活発に活動するにつれ、九州南部の空襲も激しくなっていた。1945年5月、静岡県の藤枝海軍航空基地(現航空自衛隊静浜基地)を本拠地にして第131航空隊(芙蓉部隊)が大隅半島内で不時着用に使われていた岩川基地に展開した。鹿屋の北東に位置する岩川は山林と農地が主という場所、広大な敷地の1/10程度を飛行場とした。指揮官が始めから秘匿飛行場として運用するつもりだったように、滑走路は芝生地で、滑

走で土が露出した部分は樹木や草で偽装し、移動式の家屋を設置したり牛を放牧するなどの工夫をこらした運用が行われた。その結果、終戦にいたるまで米軍に見されることがなかったという。この基地を運用していた部隊はこの頃より「芙蓉部隊」と呼ばれ、1945年初めに激戦のフィリピンから帰還した第901飛行隊、第804飛行隊、第812飛行隊の3個飛行隊が第131飛行隊に編成しなおされて出来上がった部隊で、夜間戦闘機隊として編成されていた。この部隊は、「彗星」と「零戦」を使って夜間通常攻撃を行うことを目的としており、実質は第五航空艦



現在は、「志布志市松山町西馬場3区公民館」の敷地地下にある【通信司令部壕】



公民館の敷地を囲むように6カ所にコンクリート製の入口が見られる。相当な厚さで当時の爆撃にも耐えられる仕様だ。現在は、土砂で埋められており中をのぞくことはできない。

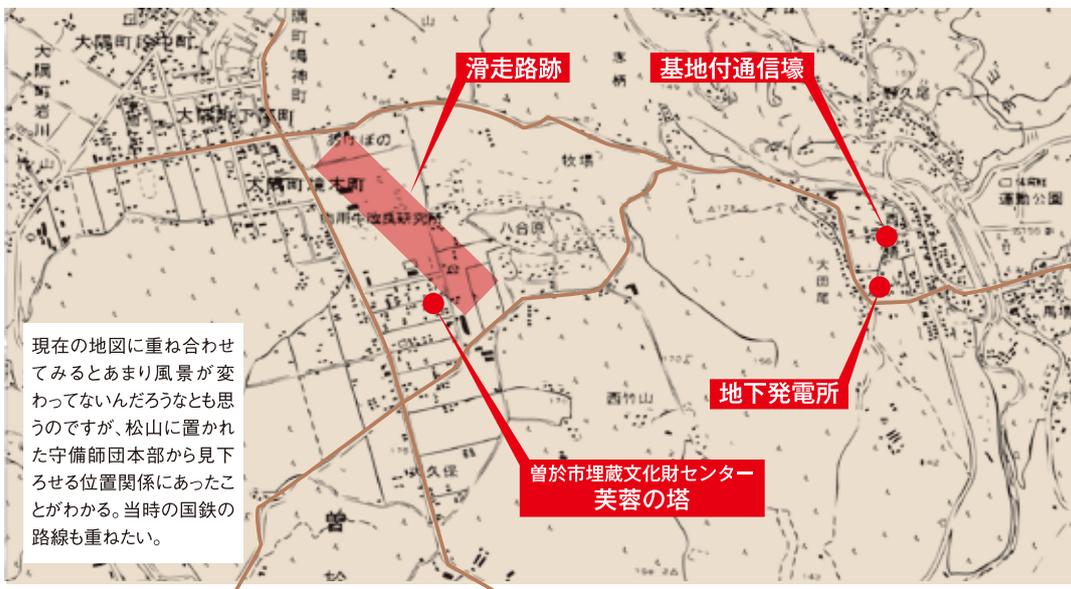


地下壕入口

旧国鉄大隅線のなごり

隊司令部所属ではなく第三航空艦隊司令部の指揮下で戦闘していた。指揮官の美濃部正少佐は、夜間戦闘を唱えており、芙蓉部隊は特攻隊として体当たり攻撃を行わなかった。当初から二段階基地構想をもっており、静浜飛行場で夜間飛行訓練をし、バックアップ基地として隊員の錬度向上と休養に活用した。また、飛行場は徹底的なカモフラージュを施し、貴重な航空機温存に努力した。当時、余分に配分されるような航空機はなく、美濃部正少佐は艦上爆撃機として生産されながら、故障が多くて全国に放置されていた水冷式「彗星」に着目し、全国からかき集め再生しながら戦力を確保した。戦力不足に苦慮する部隊が多い中、美濃部の隊だけが航空機の稼働率も80%〜90%であり隊員の士気も高かった。

「芙蓉部隊」と呼ばれた特攻攻撃をしない夜間戦闘機隊として編成。岩川海軍航空基地は牛の放牧など徹底的なカモフラージュで終戦まで米軍に発見されなかった。



現在の地図に重ね合わせてみるとあまり風景が変わっていないだろうと思いますが、松山に置かれた守備師団本部から見下ろせる位置関係にあったことがわかる。当時の国鉄の路線も重ねたい。

# 大空の彼方へ。～太平洋戦争の足跡をたどる旅～

曾於市岩川平田さん所有地の地下にある【発電所用壕】



公民館近くを徒歩で散策すると、旧国鉄大隅線の跡がうかがえる。通信司令壕から直線で数百mの県道沿いには、発電所壕があり、こちらは中を見学させてもらえる。当時の航空写真をみるとこの岩川海軍航空隊基地だけがはっきりと確認することができる。指揮官が虎の子の航空機を敵にさらすのを嫌ったためかモフラージュ(偽装)に余念がなかったと言われる。

## 垂水海軍航空隊基地

1944年2月、普通科雷爆練習生教育航空隊として開隊、鹿屋海軍航空基地と連携して、九一式航空魚雷の整備教育を行っていた。普通科雷爆練習生約800名、甲種飛行予科練習生約600名が卒業して戦地に向かった。1945年6月、いよいよ本土決戦が近くなると第61震洋隊が配備されて飛行機のない海軍航空部隊のひとつになった。

## 桜島牛根海軍航空隊基地

愛知十六試水偵「瑞雲」水上偵察機、第634海軍飛行隊は沖縄防衛に向けて1945年6月に出撃、その飛行機の形からもわかるように、滑走路ではなく海を滑走路として活用する飛行機の基地があった。鹿児島県には、指宿・鹿児島市古仁屋(奄美)とこの種類の基地があるが玄海秘匿基地が第634海軍航空隊本部訓練基地として開隊するにあわせて桜島牛根にも前線攻撃基地として桜島牛根秘匿基地が設置された。



第634海軍航空隊桜島夜間前線基地 (写真は垂水市松ヶ崎公民館提供)

日本海軍は戦艦や巡洋艦に載せてカタパルトから発進する水上機の開発に熱心で、多くの水上偵察機を開発していたが、実際、空母を運用する時代になっても、南の島に橋頭堡を確保した後地上軍を守備するために滑走路がなくとも活躍できるので重宝された。また、下駄を履いているのに性能が良かった。

海軍飛行体の美濃部正少佐は、特攻による戦果の低調なるを進行し、夜襲部隊編成を認めてもらい芙蓉部隊が結成される。

## 桜島海軍基地 第五特攻戦隊司令部

1945年4月から7月にかけて、佐世保鎮守府部隊の第四海上護衛隊を改編して、第五特攻戦隊(駒沢克己少将)を編成した。桜島海軍基地は司令部になり、第35突撃隊(細島)・第33突撃隊(油津)・第32突撃隊(鹿児島)を編成した。第五特攻戦隊には、蛟龍・海榴24隻、回天46隻、震洋725隻(1945年7月末)在籍していた。

魚雷などの武器・弾薬なども貯蔵してあったようで山全体が施設ではないかと思われるくらい



奥が深い。現在、NPO法人桜島ミュージアムが調査をされているので、現地の案内は調査結果を待ちたい。梅崎春夫が戦後派作家としての出世作、「桜島」を、米軍上陸に備える桜島への転勤が決まった暗号特技員の村上兵曹の人生という形で、自分の海軍体験を踏まえて発表している。世界3大マーチ行進曲として、軍艦行進曲(Imperial Japanese Navy)・旧友(Alte Kameraden)・星条旗よ永遠なれ(The Stars and Stripes Forever)とあるが軍艦行進曲は明治時代に垂水市出身の瀬戸口藤吉さんが作曲されている。

## 志布志洞窟陣地

下写真右手前が権現島、以前は島であったが、現在は埋立により陸続きになって山になっている。ここもかつては要塞化されていたが驚く。志布志市街には、歩兵第187連隊第3大隊の深見大隊が総延長16キロメートルに及ぶ洞窟陣地を構築していた。深見大隊の他、速射連隊、野砲連隊も終結していたので終戦当時は数千人が

奥が深い。現在、NPO法人桜島ミュージアムが調査をされているので、現地の案内は調査結果を待ちたい。梅崎春夫が戦後派作家としての出世作、「桜島」を、米軍上陸に備える桜島への転勤が決まった暗号特技員の村上兵曹の人生という形で、自分の海軍体験を踏まえて発表している。世界3大マーチ行進曲として、軍艦行進曲(Imperial Japanese Navy)・旧友(Alte Kameraden)・星条旗よ永遠なれ(The Stars and Stripes Forever)とあるが軍艦行進曲は明治時代に垂水市出身の瀬戸口藤吉さんが作曲されている。

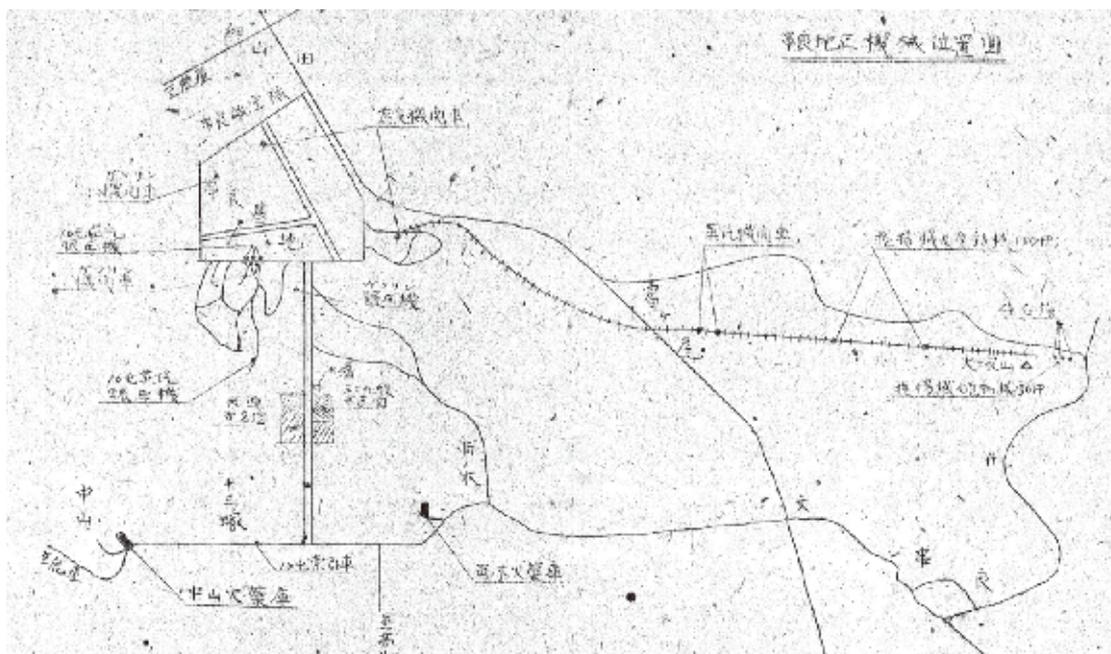


志布志に駐屯していた。この陣地は、1945年6月に九州全般の防備状況を視察した第二総軍司令官畑元帥が全軍一のモデルだと絶賛したそうだ。

さらに、海上に浮かぶ枇榔島(ピロウジマ)という無人島があるが、この亜熱帯樹に覆われた島も硬い岩盤をくりぬいて地下要塞が築かれ12センチカノン砲が志布志の町に向かって据え付けられていた。串間市の目の前の髪垂島(ピンドレジマ)にも同様に10センチカノン砲が2門据え付けられていた。

## 大塚山砲台陣地

左は、終戦当時の串良地区機械位置図であるが、大隅半島に張り巡らされていた鉄道網は基地の中に大砲や砲弾などの重量物運び込めるように、さらに細かく支線が敷設してあり、串



良海軍飛行場近くの大塚山砲台は防御陣地を構築する上で重要な拠点であったであろうことがわかる。

終戦後、線路の上には終戦時2両の蒸気機関車があり、かなりの重量物を大塚山に運びこんだようだ。

## トーチカ跡

読む資料でも詳細は違うのだが、海岸線には10kmごとに砲台が構築され志布志湾岸には下の図のように榴弾砲と加農砲で陣地が構築されていた。

1944年7月に四国と大分間の海峡に構築されていた豊予要塞から15センチカノン砲を7門もち込んで据え付けている。これは志布志湾に入ってくる艦船を水際で打撃するためのもので、山の斜面の低いところ（低砲台4門）と高いところ（高砲台3門）設置されていた。

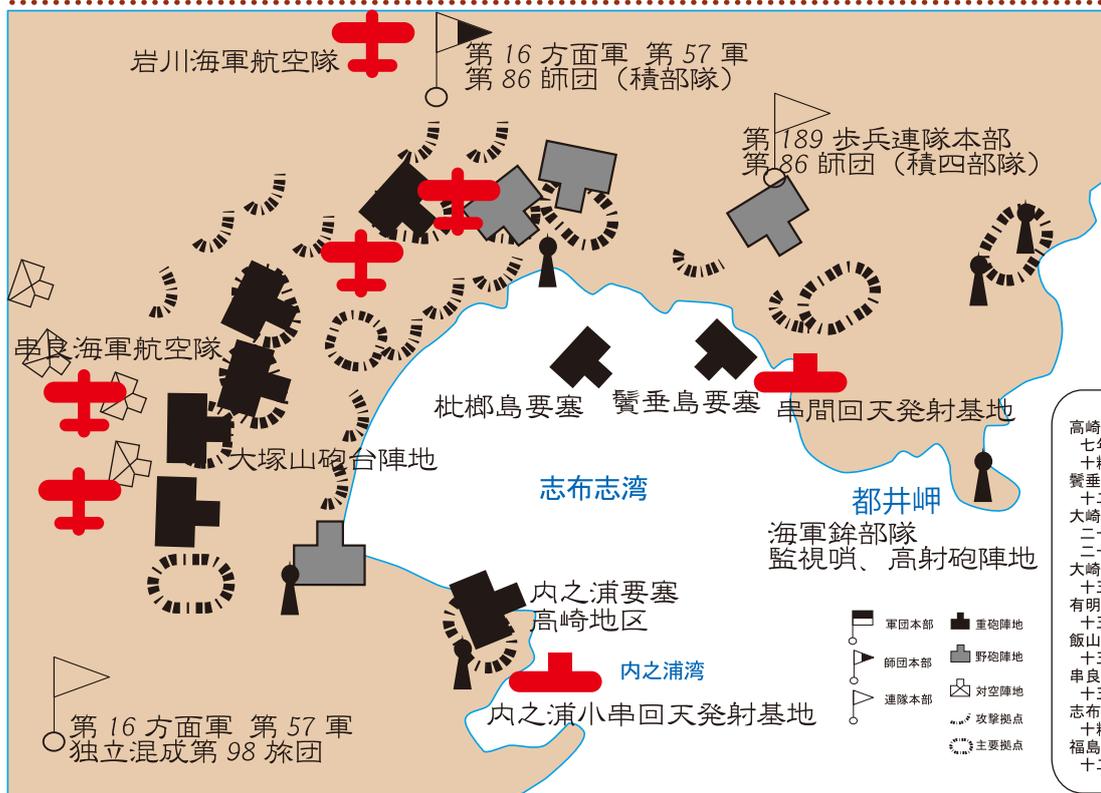
大塚山を始めとする平野部へ少し入った見通しのいい低山には対戦車を主目的とする陣地が構築されており、コンクリート製のトーチカや塹壕が平野部の小高い丘には散在していた。



大崎町四季の森の山頂には、未だ当時のままの様子で山頂部にトーチカが存在する。

マップには出てこないが、大崎町西井俣にも高射砲陣地が布陣しており、塹壕で各陣地が繋がっていた。

戦後も塹壕には弾薬が落ちて



いて子供たちが暴発事故にあたりしていたという。今ではほとんどの塹壕や防空壕の入口が危険防止のために閉鎖してある。

# 大空の彼方へ。～太平洋戦争の足跡をたどる旅～

もし、この地で戦闘が始まっていたら  
 のどかな自然豊かな農村地帯に秘められた  
 歴史の1ページ

## 決6号作戦

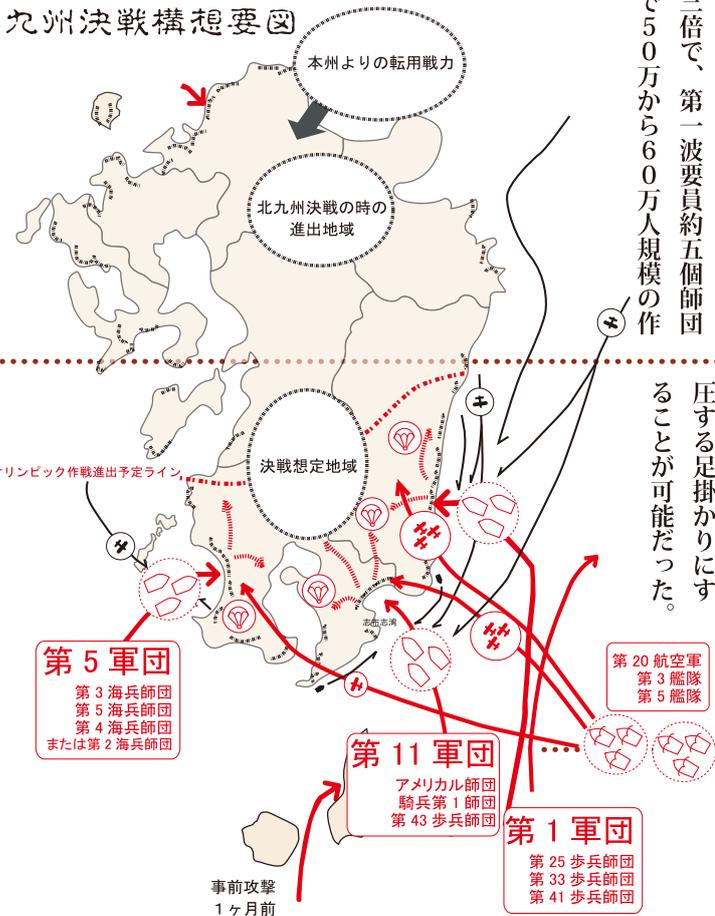
1945年4月8日、つまり  
 鈴木貫太郎内閣発足の翌日に「  
 本土決戦の準備要綱」が支達さ  
 れ、本土決戦「決号作戦」に向  
 けて動き出した。「決号作戦」  
 は北海道から九州までの軍管区  
 に対応して1号から6号に分け  
 られており、米軍がどこに上陸  
 するかで発動する作戦名が変わ  
 るはずであった。

ほとんどの見方では、九州南  
 部（宮崎・志布志・吹上）の三  
 正面同時上陸作戦が妥当な考え  
 方で主戦場地域は志布志湾沿岸  
 と考えられていた。そのため、  
 志布志湾岸には強力な地下壕要  
 塞を構築し上陸作戦の波打ち際  
 で50%せん滅、残りを陸軍で  
 せん滅と考えていた節がある。

事実、予備部隊を国分・都城  
 近辺に配置しており、戦車部隊  
 も霧島の麓に待機していた。  
 残念ながら、1945年2月  
 時点で海軍の海上戦力（機動部  
 隊）は残っていない、海上兵力  
 再建を断念していた。

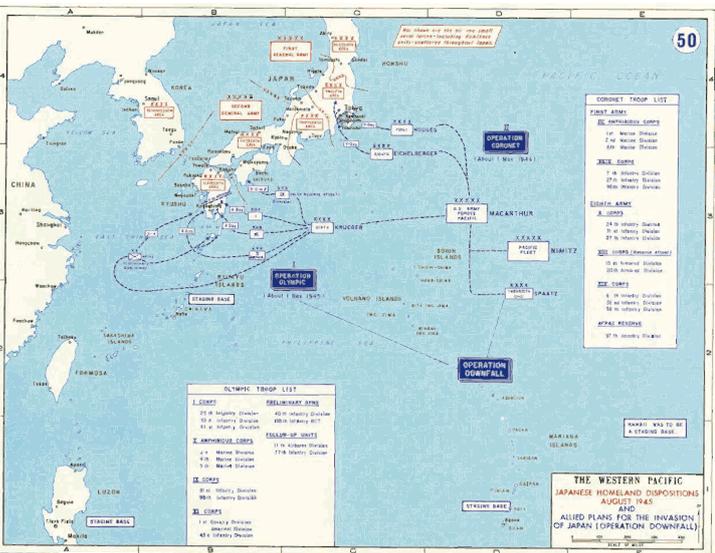
終戦時において長門（戦艦）  
 1隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦1  
 7隻があつたが動かすだけの燃  
 料も乏しく、実質は震洋部隊が  
 海軍船舶の特攻の主力であつた。  
 日本軍の予想は的中していた  
 のだが、誰が考えても、特攻の  
 出陣拠点で本土最南端とくれば、  
 物量豊富な連合軍は三正面同時  
 上陸作戦だろう。

九州決戦構想要図



オリンピック作戦進出予定ライン

事前攻撃  
1ヶ月前

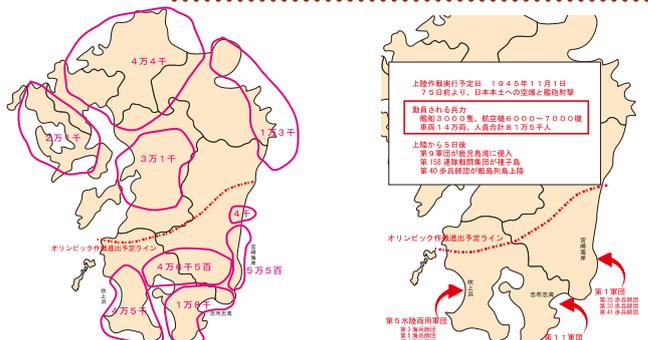


戦になったようだ。  
 防御陣営（日本）の人員から  
 すると桁が違う。  
 歴史に「もし」という言葉は  
 ないと言われるが、進攻作戦が  
 予定されていた11月に決行さ  
 れたとすると、九州南部は修羅  
 場となっていたであろうことは  
 想像に難くない。

## オリンピック作戦

日本全国の海軍航空基地から、  
 大隅・都城・延岡の航空基地に  
 集められた航空機は連合軍の目  
 から見ても終戦に向けての重要  
 拠点であり、ここを制圧すれば  
 首都東京はおろか日本全国を制  
 圧することが可能だった。

そのため、当初から進出ライン  
 は宮崎県延岡と鹿児島県出水を  
 結ぶラインまでとなっていた。  
 迎え撃つ日本側には十数万の  
 兵力しかなく9月中頃から始ま  
 る予定だった空爆や艦砲射撃な  
 どを受け壊滅的な状況のもとに  
 上陸してくる80万人以上の兵  
 力と3千を超える艦船、14万  
 両の車両、7千機の航空機の進  
 攻は結果が見えていた。  
 連合軍は、オリンピック作戦  
 の後、翌年3月にはコロンネット  
 作戦を立案しており、房総半島  
 を始めとする首都上陸作戦が実  
 施される前に航空拠点を本土に  
 構築する必要があつた。



連合軍が予想した日本軍守備兵力

## 二式飛行艇

二式飛行艇(にしきひこうてい)は、旧日本海軍が第二次世界大戦中に実用化した大型飛行艇。初飛行は1942年(昭和17年)。通称は二式大艇(にしきだいてい)にしたいいてい、にしたいいてい。二式大型飛行艇とも言ふ。なお、輸送型は「晴空」と呼ばれていた。川西航空機で生産された。

連合軍におけるコードネームは「Emily」。

現在、唯一現存する機体が海上自衛隊鹿屋基地史料館で見ることが出来ます。

航続距離が長く、当時、特攻機に十分な航法装置を積んでいなかったため神風特攻隊の水先案内人として活躍した。



## 一式陸上攻撃機

一式陸上攻撃機(いつしきりくじょうこうげきき)は第二次世界大戦中の大日本帝国海軍の陸上攻撃機である。「一式陸攻(いつしきりくこう、りつこう)」の短縮形でも呼ばれる。後継とされた陸上爆撃機「銀河」の戦力化が遅れた為、終戦まで主力攻撃機として使用された。

連合軍側のコードネームは「Betty」(ベティー)。

軍縮条約で諸外国に艦船での劣勢を余儀なくされた日本が、陸上基地から発進して洋上の敵艦船を攻撃するために開発した長距離攻撃機が原形となっており、当初から防弾は最小限にして軽量化を図り、速力や高高度性能の向上によって被弾率を低下させる方法をとっていた。

米軍では「ワンショットライター」(一発着火のライター)、「フライイングジッポ」(空飛ぶジッポライター)



などのニックネームで呼ばれた。二丁型(GAM2E)

爆弾倉を桜花(おうか)一型を搭載できるよう改修し、燃料タンクや操縦席の防弾装備を強化した桜花懸吊母機型。一部の機体は胴体後部下面に離陸促進用補助ロケットも装備できるようになっていた。

## 桜花



Max Smith

桜花(おうか)は、機首部に大型の徹甲爆弾を搭載した小型の航空特攻兵器で、目標付近まで一式陸攻で運んで切り離し、その後は搭乗員が誘導して目標に体当たりさせる。

一式陸攻にとつて桜花は通常搭載できる爆弾の量の三倍もの重量があり一式陸攻にとつては限界ぎりぎりであった。そのせいで、最高速度も落ち、通常時でさえ戦闘機には太刀打ちできない飛行運動性能であったのに、この状態で航続距離の短い桜花をはるか遠方からリーダーで監視している連合軍艦船に突入させるのは困難を極めた。

## 彗星

彗星(すいせい)は、日本海軍の艦上爆撃機。機体略号はDAY。アメリカ軍が本機に与えたコードネームは「Judy」。

単発複座の高速艦上爆撃機として設計された彗星は、艦上爆撃機としてはかなりの小型機で、零式艦上戦闘機とほぼ同サイズである。

機体下部の爆弾倉と中翼配置、空力を重視した平滑な機体外形が採用されており、特に水冷式発動機独特の先細りの機首を持つ前々中期生産型は、空冷式がほとんどだった日本の軍用機の中では特徴的な外見をしている。

海軍の航空技術研究機関である空技廠で開発された本機は、量産性よりも性能を追求した研究的な性格を持ち、高性能を実現するために当時の最新技術が多数盛り込まれた。彗星の複雑な構造は日本の生産・運用事情に適しているとは言いが、稼働率が低かった。

また水冷発動機の生産が機体の生産数に追いつかず、空冷式発動機に換装されたタイプも採用され、後半の主力となった。

当時の日本の技術力では手に余る機体と言え、そのポテンシャルを發揮する事がかなわなかった。そのため、評価が分かれる機体で仮定の話を含めて議論的となる事も多いが、大戦中期から後期の主力機であったのは事実である。



彗星(すいせい)

この艦上爆撃機「彗星」は、岩川の海軍航空基地で零式艦上戦闘機と共に芙蓉隊で使用された。

当時、国内は物資が逼迫し、熟練した整備技術者も少なくなっておりドイツから技術供与を受けて開発された水冷エンジンの整備は当時の整備環境では困難であった、そこに目をつけた美濃部隊長は、各地の飛行基地に眠っていた機材をかき集めて、優秀な整備兵を自隊で教育し、豊富な予備部品と航空基地での機体の偽装などの努力で、飛行機の稼働率8割以上を達成していた。

当時としては斬新なバックアップ態勢を取る形で静岡の基地と岩川の基地が運用されていた。

夜間戦闘機として分類されることもあるが、本来は航空母艦に艦載する爆撃機として開発されていた。

# 大空の彼方へ。～太平洋戦争の足跡をたどる旅～

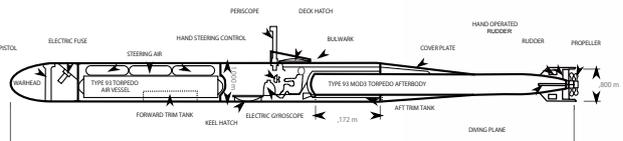
## 回天



回天(かいてん)は、旧日本海軍の特攻兵器の一つで、駆逐艦、巡洋艦用に採用された超大型魚雷「九三式三型魚雷(酸素魚雷)」を改造したものである。

九三式三型魚雷は、直径61センチ、重量28トン、炸薬量780キログラム、時速約30キロで疾走する無航跡魚雷であり、主に駆逐艦に搭載された。回天は、この酸素魚雷を改造して、全長14メートル、直径1メートル、排水量80トンで、魚雷の本体に外筒をかぶせて、気密タンク(酸素)の間に一人乗りのスペースを設け、簡単な操船装置や調整バルブをつけ、襲撃用の潜望鏡を設けた。炸薬量を15トンとして、最高速度時速55キロで33キロメートルの航続力があつた。当初突入前に乗員の脱出装置のハッチがあつたが、航行安定に悪影響をもたらすこと、脱出後は敵の捕虜になること、また脱出装置自体の製作がまにあわなかつたことから結局は廃止された。

## 震洋



震洋(しんよう)は、第二次世界大戦の日本海軍の特攻兵器。秘匿名称は「〇四(〇の中に四)金物(マルヨン)かなもの」。

小型のベニヤ板製モーターボートの船内艇首部に炸薬(約250kg)を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦。上陸船団に体当たり攻撃することが目標とされた。末期は敵艦船の銃座増加に伴い、これを破壊し到達するために2発のロケット弾が搭載された。また、2人乗りのタイプもあり、こちらは機銃1〜2丁が搭載され、指揮官艇として使用された。陸軍には四式肉薄攻撃艇(マルシ)が開発された。



## 零式艦上戦闘機

零式艦上戦闘機(れいしきかんじようせんとうき)は、大日本帝国海軍の主力艦上戦闘機。零戦(ゼロセン)の略称で知られている。

海軍の艦上戦闘機としては、実質的に最終型で、支那事変(日中戦争の当時の呼称)の半ばから大東亜戦争の終戦まで、主力戦闘機として前線に運用された。

大戦初期、長大な航続距離、重武装、優れた格闘性能により、連合国の戦闘機に対し圧倒的な勝利を収めたことから、当時の連合国パイロットから「ゼロファイター」の名で恐れられた。

しかし、大戦中期以降、連合国側新鋭機の大量投入や日本側のベテラン搭乗員の損失からその戦闘力の優位は失われ、大戦末期には多くの日本機と同様、神風特別攻撃機としても使用された。

海上自衛隊鹿屋航空基地史料館には、垂水沖と吹上浜沖で引き揚げられた零式艦上戦闘機五二型が館内に展示してある。

日本全国の海軍航空基地から集まって来た航空機は、この大隅半島の各地にある海軍航空基地から飛び立っていった。終戦末期、大隅半島は巨大な不沈空母と化していた。



## 雑記

旧軍(陸軍・海軍)は明治維新後、明治維新を推進した薩摩・長州・土佐藩出身の武士が中心となつてつくれた。維新の頃の陸軍大臣・海軍大臣は鹿児島県出身者が非常に多い。

旧軍では、陸軍と海軍しかなく現在で言う独立した空軍はなかった。航空機はすべて陸軍か海軍にわかれており、目的に合わせてお互いに航空機開発競争を行っていた。

陸軍を進軍する陸軍と海上を艦船で進軍し島嶼を拠点としていく海軍は、太平洋戦争初期より協調して作戦を遂行していなかった。大戦末期に至っても、協調することはなくそれぞれの方針で作戦が実施されていた。

太平洋戦争末期に旧日本軍が編成した連合軍艦船に対する体当たり攻撃を実行する部隊のことを総称して「特別攻撃隊」といい、陸海軍あげての大規模な作戦として実施されたが、乗員が生還する可能性はなかった。海軍の航空機からなる特別攻撃隊のことを「元寇を追い払った神風」に由来した「ネーミング」で「神風特別攻撃隊(しんぷうとくべつこうげきたい)」かみかぜとくべつこうげきたい」という。

終戦の一年前に戦局の挽回を図るために海軍では潜航艇(蛟龍)、対空攻撃用兵器「可潜魚雷艇(海龍)、船外機付衝撃艇(震洋)、自走爆雷、人間魚雷(回天)、電探、電探防止、特攻部隊用兵器などの特攻奇襲兵器の試作方針を決定し実用化されていた。

太平洋戦争開戦時には世界第三位の艦船を所有していたが、終戦時にはわずかな艦船しか残っておらず、実際の戦闘航行が可能な艦船が四〇隻程度であった。しかしながら運用するための燃料も残っていなかった。連合軍の計画していたオリピック作戦が一九四五年一月一日に行われていたとすると、さらに太平洋戦争の犠牲者の数が増えるだけだった。

